

有本芳水賞

優 秀 賞

がんばれわたし

たつの市立蒼田小学校 一年

くぼた な な

五さいからはじめたしゅうじ
だいすきなことの 一つ
すずりにトポトポすみをいれる
すみのつんとくるいいにおい
うすちやいろのはんしを
そつとおいて
ぶんちんでのばしながら
トンとおく
すずりにポチャんと
ふでをつける
いらないすみをとって
ふでをまわしながら
ほさきをととのえる
こころをおちつかせて一かくめ
せすじをピンとのばして

きんちょうのしゅんかんだ
トンとちからづよくしひつ

ピタツとていねいにしゅうひつ

スーツとちからをぬいて

シュツとはらう

スピードをあげてピンとはねる

ふでをおいてかきおわったとき

うれしくてたまらない

むずかしくて

うまくかけないときもあるけど

れんしゅうすれば

きつとうまくなる

いつかおにちゃんみたいにな

きれいなじをかきたいな

じいちゃんのあたま

太子町立斑鳩小学校 一年

さいとう わか

じいちゃんのあたまには けがいつぽんも
ない

だから じいちゃんのがおえをかくとき
はかんたんです

まるをかいただけです

じいちゃんをつむじはどうなっているのか
きになって じいちゃんがすわっていると

きにあたまをうえからのぞいてみました

つむじはなかったです

けがないと つむじもないらしいです

あたらしいはっけんでした

おにわでせみのぬけがらを 見つけたよ

姫路市立白鷺小中学校二年

空 ち まなみ

おにわでせみのぬけがらを見つけたよ。
大きな木のはっぱのうらにくっついていたよ。
おかあさんにぎゅっとつかまってるみたいだったよ。
でもね、せみってうまれたときには、おかあさんもおとうさんもないんだよ。
ひとりでからをやぶっておとなになるんだよ。
ぬけがらのせながばっくりあいていたよ。
木の上でせみがいっぱいいないていたよ。



さをりおり

姫路市立白鷺小中学校二年

足 立 善 子

かべいちめんの糸の中から
むらさき色をえらんで
はたおりかいし
足で、とん
シャツルを通して、しゅう
糸をおして、こと
とん しゅう こと
たの しい こと
黄色のわたをさしこんで
とん しゅう こと
たの しい こと
うふふ

ぼくの楽しみ

太子町立斑鳩小学校 三年

さいとう じん

ぼくには 楽しみがある

それは 大人になって父さんとお酒をのむことだ

そして 父さんがいつもお酒をのんだら言う

「プハァー、あー、うんまあ！」

というせりふを言うこと

ぼくも

「プハァー、あー、うんまあ！」

と言いたい このせりふが言いたい

言いたすぎて ジュースをのんで言ってみた

「プハァー、あー、うんまあ！」

たしかにジュースでもおいしい でも父さんみたいに心のそこから出るせりふではない気がした

父さんは本当においしそうにお酒をのんでいる

心のそこから お酒を楽しんでいる



ぼくも 大人になったら 父さんとお酒をのんで

あのせりふを 言いたいのだ

「プハァー、あー、うんまあ！」

ジュースで このせりふを使うには もったいないから 大人になるまでとっておこう

とびたてセミ

たつの市立菅田小学校 三年

久保田 湊 大

ジージーミーンシャワシャワ

色いろなセミの声が鳴りひびく

ぼくんち

月明かりのきれいな夜

何年も地中にねむっていた幼虫が

門びに一ぴきいた

茶色のかたいボディースーツを

パリッとせ中から開いて

ウニヨウニヨゆつくりあらわれた

体そうせん手みたいに

振り返ったり逆さつりになったり

だんだん羽が大きくなってきて

少しずつおき上がってきた

のこっている力をふりしぼり

おなかをぬいて

ボディースーツにぶら下がって

ちよつとずつちよつとずつ

アイロンかけたみたいに

羽がピンとなった

しずまりかえった夜に

一つの命が生まれた

ぼくはそこだけがやいて見えた

茶色のボディースーツから

すき通ったにじ色のドレスに

いしようにえ

やつと会えたねセミさん

さあ広い世界へとびたて

仲間とともに

高砂市立曾根小学校 四年

井 上 蔵之助

ぼくは今日もコートの中を必死に走る

一月、ぼくは初めてユニフォームをも

らった

うれしかった「17番」

試合に出ることがなくてもチームに付いて行くこと

ベンチからの声出しをして精一杯応援すること

それだけでうれしかった

五月、もつともつと頑張ろうと決意した

「15番」

八月、試合に出してもらえることも増えてきた

でも、練習の様には上手く行かないこともたくさんあった

そんな時、ぼくの背中をポンとたたいてくれる仲間がいる

そんな時、かけよって声をかけてくれる

仲間がいる

ぼくはまだ、チームの仲間を追いつける様にもつともつとがんばらないとだめだけど

いつか、仲間の背中をポンとたたいてあげられる選手になれるように

いつか、声をかけてあげられる選手になれるように

ぼくは今日もバスケットコートの中を必死に走り続ける

今日も仲間とともに

夏の楽しみ

加古川市立加古川小学校 四年

多 月 夢 瑠

重たいとびらをぐつと力をいれてあげると
ひんやりとつめたい空気が
ふわっと顔にまとう。
カルピスみたいな香り。
手を入れてひんやりする。
頭も入れて顔につめたい空気をあびる。
私はれいぞうこをあげたしゅんかんの空気
と香りがすき。
氷のとびらをあげるとガラガラと
音になる。つめたい音。
こっそり一つ口に入れる。
つめたくてペロがキンキンにこおりそう
私の夏のひみつの楽しみ。

お母さんの話

福岡町立田原小学校 五年

朝 生 莉 杏

私のお母さんは左耳が聞こえない
私が産まれる前にお母さんの左耳の下に
腫瘍というできものができた
私を産んでからすぐにその腫瘍が
お母さんをおそった
お母さんは手術をすることになった
腫瘍をとる手術だ
腫瘍をとったら
体の左半分の神経がほなくなった
左目からは涙が出なくなってしまったし
左耳は聞こえなくなってしまった
入院していた期間は三カ月だ
私は産まれてすぐに
三カ月間お母さんとはなればなれだった
でも親せきやお父さんに
だっことをしてもらって愛されていた
この話をお母さんは私が五才のときにした
その話を聞いて私の目からは
大粒の涙が大量にこぼれおちた記憶がある
今もたまにこの話をお母さんに聞きに行く
んだ

雷

姫路市立高岡小学校 五年

大 塚 穂 高

何かに気づいて空を見る
黒いヌーが群れでおそいかかってくるよう
に
近づく音がする
ひかるヒカル光る
地ごくの柱がおりてくる
ちかい近いちかい
音と光につれさられ
ただ見上げる
ぼくの胸につきささる
雷神
弱い気持ち焼ききって
白い光でこわしくす
あの日から新しいぼくが始まる

あこがれ

福岡県立八千種小学校 六年

前 田 優 希

「せんせい。」

私は、今、朝礼台の前にいる。

今の私の心臓は、だれよりも速く、ドクドクと鳴っている。

今まで何度も練習してきた運動会の選手せんせいのセリフ。

完べきに覚えているはずだけれど、少し心配だ。

私は、五年生の時、応えん団長の葉摘さんを見て、かっこいいと思った。

六年生になったら、あんなふうになりたいと思った。

六年生になり、運動会が近づいてきた時、先生が、

「来週、応えん団のオーディションをします。」

と言われた。

私は、すぐに立候補した。

オーディションは、六年生みんなの前で、

エールをするという内容だった。不安よりも、楽しみだった。

オーディションの日まで、家でも練習した。それを聞いていたお母さんが、

「大きな声でひびくなあ。」

と言ってくれて、自信になった。

いよいよオーディションの日、ライバルは二人だ。

私は、今までにないぐらい大きな声を出そうと思った。

「フレ、フレ、白組、ファイト、ファイト白組。」

それを聞いた先生は、

「合格。素晴らしい声で、びっくりしました。」

と言われた。

そして、私はあこがれの団長になった。

団長になって、一番がんばったのは、選手

せんせいの練習だ。

これは、赤組団長と息をそろえて言えないと、かっこ悪いからだ。

難しい言葉を覚えるために、何度も練習した。

始めの一言をはきはきいう練習をした。

二人で息をすうタイミングを練習した。

そうやってむかえた今日の本番。

順調に、言葉を言えている。

難しかった「最後の運動会をむかえました。」

も、合わせることができた。

これさえ乗りこえれば、あとは大丈夫。

「・・・白組団長、前田優希。」

とうとう、最後まで言い切ることができた。

何度も、何度も練習しておいてよかった。

私があこがれたように、私もあこがれられる応えん団長になれたかな。

夏の宝箱

姫路市立勝原小学校 六年

島 田 幸 芽

夏休み

毎日、お弁当を作ってくれるお母さん

お弁当を開ける前から、だいたい入っているおかずが分かる

分かっているのに、開ける瞬間は、なぜか心がいそいそする

シヤカ シヤカ ジュー

卵焼きは、お母さんの忙しさが分かる

卵焼きは、毎日味が違う

すごく甘い日

なんだか、しょう油が多くてしょっぱい日

あれ？今日は、少しこげて上手に巻けなかったのかな

気がつくと、一人で食べているのに、お母

さんと会話をしているかのように、楽しい

時間

『お母さん、おはよう』

『おはよう。お弁当、毎日同じようなものでごめんね。』

『いいよ！毎日、楽しみだから。フフッ』

『なあに？』

『なんでもないよ』

ギュッ ギュッ ギュウー

おむすびには、お母さんの心があふれている

おむすびには、お母さんの手の跡があった
そして、お母さんの温もりがあった

まるで、わたしが、おむすびになったように感じた

夏休みのお弁当は、毎日お母さんからお手紙をもらっている気持ちになった

わたしの手は、まだお母さんみたいに大きくはないけれど、お母さんに負けないデコ

ボコしたおむすびを、ギュッとにぎり返したい

そして、一人でお料理が出来るようになったとき、

夏の宝箱をプレゼントするからね

